

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	言語学と地理学の新しい接点
Author(s)	橋内, 武
Citation	ニダバ , 6 : 53 - 54
Issue Date	1977-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050976
Right	
Relation	



言語学と地理学の新しい接点

橋 内 武

I

言語学と隣接科学の交渉は、近年とみに進んできている。言語学と哲学、言語学と心理学、言語学と数学、云々といった結び付きが見られるわけである。ところが、「言語学と地理学」の接点を明らかにするような論文は、少くともわが国では発表されていないようである。本発表は、ある意味で、この隙間を埋める試みであった。

まず、この2つの学の間で成立するものとして、

- (1) 言語地理学(方言地理学)
- (2) 地名学
- (3) 言語圏論
- (4) 地理学的言語学

の4領域を挙げ、若干の解説を加えた。このうち、P、トラッドギル(1975)のいう「地理学的言語学」は、本発表の要であり、2つの学の新しい接点をなすものである。これは、言語現象の空間的変異を説明するに当り、理論・計量地理学の方法を援用しようというものである。

II

このような新しい地理学は、次のような点で言語研究に貢献する。

- (1) 地理学的標本抽出法を用いての言語調査。
- (2) 地図学の新しい方法を使っての計量的言語地図の作成。
- (3) 空間的拡散理論を援用して
 - A 複雑な言語事情の国々について、社会言語学的説明を下したり、言語政策を提出したりすること。
 - B 方言変化の伝播や等語線について説明したり、予測を立てたりすること。
- (4) 空間的相互作用モデルの1つである重力モデルを使い、ある中心地から他の中心地へ言語が影響する際の説明図式を与えること。

以上、(1)から(4)までのうち、(1)と(2)はより実際的な研究に役立ち、(3)と(4)はより理論的な研究に貢献する

ものである。

Ⅲ

初めに挙げた、言語地理学や地名学や言語圏論は、「言語学と地理学の接点」に成立するとはいうものの、地理学の占める比重は実に軽いものであった。地名学はさておき、言語地理学も言語圏論も、総じて地理学から手に入れたのは、ある現象の空間的分布と地域区分というほどのことにすぎない。一方、地名学は地形学・集落地理学・歴史地理学などの知識を借りたが、どこまでも伝統的地理学の枠組（何がどこにあるかという地表上に観察され得る事象の記載に終始する）の中にとどまっていた。

Ⅳ

それに対して、近年急速に発達を遂げた理論・計量地理学は、地表事象の中に認められる空間構造をその空間的過程から説明し解釈することを意図し、空間的秩序に関する理論体系を打ち立てることを最大の関心事とする。今やこのような新しい地理学を学び、その概念と方法を積極的に言語学の領域に取り込もうとする言語学者が、現われてきた。E. A. Fendras や B. Jernudd や P. Trudgillらである。かれらの業績に代表される「地理学的言語学」は、言語学と地理学とが接する研究領域に質的に新しい次元を拓くものといえよう。

詳しくは、筆者の紀要論文「言語学と地理学の接点」（『ノートルダム清心女子大学紀要——外国語学・外国文学篇』第1巻第1号（通巻第12号）を参照されたい。

1976年12月25日脱稿